



日本経済新聞社 産業部 小松 潔さん 平成5年3月より2年間経団連記者クラブ/重工業研究会に所属 ベテラン記者として、時に辛口記事の、鉄を愛する記者である この3月より機械クラブに所属

・新聞記者の夢・ロマン・ 鉄の躍動をペン先に

◆「鉄は国家なり」の時代から見ると“地位低下”のイメージを抱いていたのだが、担当してみて鉄鋼業界の重みは依然として大きい、「産業の米」として人類の創造的活動に占める存在の大きさを実感しました。

◆R&Dの余地も少ないのでは、と思っていましたが、依然として開発案件が一杯ある。川の流れのように一見表面的には変化はないが、実はその中では新しい発見・進歩が一杯あって、奥が深い、噛めば噛むほど味が出る。ほめ過ぎたな、これは（笑）。

坂上 鉄は人類にとって実に身近な存在です。鉄のルーツに思いを馳せると、例えば日本の鉄の歴史はたたらが主です。1トンの玉鋼を造るには、確か12トンの砂鉄と同量の木炭が必要といわれている。鉄は森から造られてきたとも言えますね。この自然や文化への“近さ”，そこに素材性を強く感じます。よりプリミティブに、自然を生かすかたちで鉄を使っていきたいと思っています。

鉄の世界、特に建築の世界で最近強く感じるのは、使う側と造る側の距離が遠い、ということ。建築家（設計者）がいてゼネコンがいてアプリケーターがいて鉄鋼メーカーがいて、それも営業の方が主たる窓口でその先に製造があり研究・開発部門がある。例えば、ほとんどの建築家がカタログより選んでいるのが現状でしょう。素材の機械的性質だけではなく、文化性、自然との近さといった面での特性がどの程度理解されているのかな、と。建築の世界は実に広い文化を持った世界ですが、建物を造る側に鉄の良さを本当に分かっていない、あるいは分からせてないケースが一杯あると思う。使う側にとっては特に素材を選ばない時代なのかもしれませんね。

鈴木 現代の建築では木造、鉄骨、鉄筋コンクリート造が代表的ですが、将来の超々高層ビルの可能性を考えると鉄のイメージがふくらんできますね。仕事柄、例えば鉄製の素敵な門扉があると聞くと見に行ったりしますね。仙台の近代文

◆鉄は生活の隅々まで溶け込んでいて、その存在を特に意識しない。だから、改めて鉄がすきかどうかなんて考えたことはないんだけど、子供の頃その逞しさが好きだった鉄人28号や軍艦は実は鉄だった、のですよ。

◆人類の発展は鉄とともにあります。日本も戦後は、傾斜産業政策としてまず“平和のための鉄（素材）づくり”から始め今日の繁栄を築いてきました。その過程で合併、技術指導などを通じて多くの国々の産業発展や国家建設の礎となり、同時に各国からの日本への理解を深めてきたわけです。人類・国家・民族の交流に貢献してきたわけで、そのベースは鉄が人類にとって万国共通素材である、ということです。日本はこれからも世界の掛橋として、特に環太平洋の掛橋として重要な役割を果たして行ってほしいですね。

◆製鉄所のチームワークの良さ、雇用を大事にしていること、鉄の暖かさを感じます。大地に根をおろした産業とでもいえるかな。ただ製鉄所は男の世界のイメージだけれど、男性、女性が一緒に構わないわけで、そういう世界にしてほしい。それによってより鉄の良さ、暖かさ、優しさを増やして行ってほしい。将来、鉄の世界で女性社長が生まれれば楽しいじゃないですか。

◆今の日本は土地本位性ですが、もっと鉄を生かしてほしい。インフラ整備もあるだろうし、環境問題もある。もっともっと社会を良くしていくために鉄を使うべきですよ。そのためにも鉄鋼業界の皆さんは、新技術、新製品、新用途の開発、開拓に力を注いで、そして最先端の鉄鋼業の未来像を具体的に描いて行ってほしいですね。私も新聞記者として、そういう“鉄の躍動”を行間に伝えていきたいと思っています。

・芸術家、 一緒に現代鉄器（木

鈴木ひろ子さん

（株）ネオタイト建築計画の若手建築士 平成10年度に開館予定の仙台市「近代文学館」の設計コンペでは、同社案が最優秀案に選ばれた小学生の頃から「建築家になりたい」とはっきり夢を持っていて、その夢を実現した今、様々なジャンルの建築を手掛けている“住宅”が一番好きな鈴木さんの鉄への印象と期待



学館にも鉄はたくさん使っていますよ。コネクト方法が違うなど木材とは違うところが結構多いので、鉄の現場は大工さんの世界とは違ったおもしろさを発見できます。まず第一に重いですから、強度計算から違います。

日本での鉄の使い方ですが、まだ、“素材”でしかないよ

ピアノ調律師 徳田堅輔さん 世田谷区喜多見「徳田ピアノサービス」を経営 横須賀出身 研修期間を加えるとピアノ調律師歴約35年の大ベテラン 今時の音楽はよく分からないが、クラシックにかけては少しうるさい 3人の男の子の父親



徳田さんは、ピアノのお医者さんである。毎日、1台約2時間位かけてピアノの音をよみがえらせる。

◆力強く張りのある音を支えているのは、純度の高い鋼鉄でできているミュージックワイヤー（弦）です。これは、普通に知られているピアノ線とは全く違うもので、1本の張力が何と最大90キロ、全部で230本、合わせると16トンにもなります。これだけの張力に耐えるワイヤーでないと、張りのある豊かな音色をだすことはできません。

木製のピアノケースの中の230本の鉄ワイヤーとそれを支える頑丈な鉄板と鉄骨が確かな音をつくりだす。でも、これほど強いワイヤーにもやはり泣きどころはある。

◆「錆びない鉄」があれば、ワイヤーには最適だと思いますね。日本は湿度が高いし、特に暖房が入る冬は、ワイヤーにとって悪条件が重なります。手入れが行き届いていないとワイヤーは正直ですから、すぐに錆び付いてきます。もちろん、ステンレス製にしたり、表面にメッキしたりすることはできるでしょうが、音が格段に変わってしまうんですね。

鉄の細やかな振動が、微妙な音の違いを生み出す。だからこそ、鉄の地肌が大事なのだ。エッ、地肌でいけないところもある？

◆鉄は鍵盤には不向きですね。感触が冷たく、堅い。汗も吸い取りません。これらを克服するような鉄が発明された

・・・ピアノに響く夢・ロマン・・・

心に呼びかけてくる鋼鉄の弦

ら、丈夫な鍵盤になると思いますよ。昔は象牙を鍵盤に使ってました。表面のなめらかな感触は象牙ならではのものです。鉄にも、あの暖かさがあるといいですね。

鉄と木とフェルトでできているピアノ。約300年前にイタリアで生まれ、以来たくさんの人たちの心を和ませてきた。外からは見えないけれど、中からしっかり支えている鉄があればこそ、これからもずっと美しい音色を奏でるだろう。そんなピアノの「緑の下の力持ち」が徳田さん。

◆機械で調律することもできます。でもね、人が聞いて心に響く心地良い音色は、やはり人の手によらないと出せないと思っています。1本のワイヤーが私の心に呼びかける音を、全身で受けとめてあげるんですよ。1本1本の鉄のワイヤーが、皆生きていますね。

築家の夢・ロマン・・・

文化を咲かせましょう

坂上直哉さん

調布と葉山にアトリエを持ち、アートワーク「空」を主宰 学生時代にステンレスと出会い、昭和48年、日新製鋼(株)と“ステンレスにより絵を描く”発想を基本としたテクノロジー研究開発をスタート 東京国際空港(羽田)ロビーの『虹にむかって』『虹にそまって』を始め、ステンレスの新しい世界を表現したたくさん作品がある



うな印象を受けますね。ヨーロッパで強く感じたのですが、駅やいろいろな公共物に鉄そのものが意匠化されて結構使われているんです。実に構造的かつ美しい装飾になっていて、人間生活を豊かにする可能性を持つ“道具”として機能しています。実際には日本にも結構あるんですが、どう

もモダン建築という世界の中に鉄の持つ機能的良さが隠されてしまっているように思えます。

坂上 日本の場合は工芸的な世界から、一気に近代の工業生産の時代へ、大量生産の世界に飛躍していった。ところが欧州ではコツコツと近代化の過程を歩みながら、鉄もその機能を熟成させ、文化性を育ててきている。そこら辺の歴史的な風土の違いがあるのかな。

鈴木 日本では身近な存在のものがどんどん消えていって感じるようになって…。鉄への期待は、ひとつはこれからもっとスパンが拡大して超々高層ビルなどの世界が切り開いていかれることを期待していますが、一方で、もっと身近な存在のもの、クラフト的なものをもっと大事にしていきたいですね。私たち、設計者は自分で直接物を造る立場ではないこともあって、職人芸的なものにもっと多く接し、鉄を良く理解している人達と組んで仕事をしていきたいと思っています。

坂上 鉄が風景の中で何を提案していこうとしているのか。設計を考える人達のことを鉄鋼メーカーはもっと深く考え、双方のコミュニケーションやネットワークをもっと強化していくことが課題ではないでしょうか。

でも普通鋼は少しずつ錆びて私と一緒に年をとっていつくくれますが、ステンレスはなかなか自分と一緒に年をとってくれません(笑)。そこがまた魅力ですが。